

## 請願の議員説明案

- ・ 請願者の小野さんがおっしゃったことに加えて。
- ・ まず請願事項の第1項から第3項に関して、お配りした資料をご覧ください。請願者の方がおっしゃったことの他にも、ざっと調べただけで、マスクの弊害についての記事はたくさん出てきます。主なものをご紹介します。
- ・ **1枚目、時事メディカルの記事**
- ・ ロッテが一昨年の8月に行ったWEBアンケート調査の話
- ・ 「頭がぼーっとして、物事に集中しづらくなった（50%）」等
- ・ これは大人に対するアンケート結果。大人は、子どもと比べて忍耐強さ、気持ちの切り替え方を習得している。その大人ですらこの状況。子ども達は同様以上の苦しみを経験していると考えた方がよい。
- ・ ここでいう健康リスクは別のところに詳しく書いてあるが、『表情筋の衰えは、うつ状態など感情変化やひいては食事中的ムセなど、誤嚥の危険性に繋がります。マスクは気道抵抗を高めるため口呼吸になりやすく、口内炎や歯周病の悪化のみならず、アレルギー性疾患の増加にも繋がります。』
- ・ **自分の表情を気にしなくなったと感じている人は約4割**
- ・ 後ほど別の記事でも紹介するが、マスクをすることで、友達や先生の表情を読み取るということが出来なくなる問題に加え、自分の気持ちを表情で表現することをしなくなる。表情筋が鍛えられなくなり、もしかすると今後マスクを外しても無表情の子ども達が増える可能性もあるのでは
- ・ **新しい生活様式は、マスク着用の習慣化をもたらしましたが、それが私たちの心身に多くの症状をおよぼす可能性があります。熱中症や肌荒れ、口臭など自覚しやすいものから、集中力の低下や睡眠時無呼吸症候群、うつ病など意識するのが難しいものまで様々です。それらを総称して“マスクシンドローム”と呼ぶことができるでしょう。表情筋の衰えは、うつ状態など感情変化やひいては食事中的ムセなど誤嚥の危険性に繋がります。マスクは気道抵抗を高めるため口呼吸になりやすく、口内炎や歯周病の悪化のみならずアレルギー性疾患の増加にも繋がります。マスクの習慣的着用による健康リスクを理解している人は約半数という結果がでていますが、新しい生活様式において健康的に過ごすには、こうしたリスクを理解しておくことが必要です。**
- ・ **続いて2ページ目、これも同じところにフジテレビ系のFNNで放送されたものだと思う**
- ・ 「子どもが笑わなくなった」
- ・ 常時マスク着用が、コミュニケーションの阻害要因になっていることが伺われる。小平市も同じ状況があると思う。それに対し、教員や教育委員会はどのように考えているのか。私は、実際に複数の先生方から、まったくこの記事の通りの状況を、とても憂慮しているという声を聞いている。
- ・ また、当時の萩生田文科大臣がおっしゃった、とても大事なことも書かれている。
- ・ 「人々の優しさはウイルスとの闘いの強い武器になる」
- ・ さまざまな理由でマスクができない、そしてマスクができないところを背景にした、マスクをしたくない子ども達がいること、それをきちんと周知することは、私たち大人が、子ども達に示す、やさしさのひとつ。私もこのウイルスとの闘いという世界を乗り越える武器は、やさしさでなければならないと考えている。
- ・ 科学的知見にもとづかない自粛警察や同調圧力は、子どもの健全な成長と学びの場を奪うだけだ。
- ・ 自粛警察や同調圧力は、やさしさと逆行するもの。
- ・ **NHK NEWS おはよう日本で放送されたもの、昨年6月に更新されている記事**
- ・ 「目だけで情報が通じ合うのは大人の世界です。子どもたちは表情のなかのたくさんの情報を使って、少し

ずつ少しずつ、相手の表情、感情というものを理解していくわけです。そういった経験が今回のコロナ禍において一気に失われていく可能性が高いです」

- ・ 皆さんも分かってらっしゃると思うが、大人は言葉でコミュニケーションが取れる。しかし子ども達は自分の気持ちを言葉で表すことがまだできない。幼い子ども達にとって、表情で行うコミュニケーションは非常に大切。幼い子ども達がお互いにマスクをつけている生活を続けているということは、表情で行うコミュニケーションがとれていないということ。相手の気持ちを理解する能力が育たないことになるのではないか。
- ・ マスク生活による異変は、小学校でも起きています。ある小学校の休み時間に、1年生の教室で起こった友達同士のけんか。
- ・ たまたま手がひっかかったことに「ごめんね」と謝ったものの、マスクをしていたためか相手に伝わらず、けんかに発展してしまったようです。ささいなトラブルはよくあるものの、いつもよりコミュニケーションに苦勞する場面が増えたといえます。
- ・ 小平市においても、先生方はもちろん、教育委員会も、こういった事例を把握しているはず。早く手を打たないといけないと思ってる教育関係者は多いのではないか。そこまで多くの先生と接点がない私の元にすら、この状況を憂慮している声が届く

#### ・ 汐見先生の話（しおみ としゆき）

- ・ 東京大学名誉教授、白梅学園大学名誉学長
- ・ 長年白梅学園大学で学長をされてきた方、白梅学園大学の進展に寄与した功績が特に顕著であった方に授与される名誉学長になられている方
- ・ 月刊赤ちゃんとママに昨年8月に掲載された記事
- ・ [昨年暮れ、ドイツの～](#)
- ・ 表情によるコミュニケーションも不足すると言ったことも書かれている
  
- ・ **1月30日のニュースポストセブンの記事**
- ・ [昨年ブラウン大学が行った～](#)
- ・ これは、先ほどのNHK NEWSで放送された内容と一致する。周りの人々がマスクをしていることで、認知能力が下がっているのではないか
- ・ [下の方に、マスク着用によって～](#)
- ・ 冒頭のロッセの記事には、口呼吸が増えることでの問題も書かれていた
  
- ・ それから、もうひとつFNNの、先月放送されたものだと思うが
- ・ もう一つはとても危惧しているが、子ども達～
- ・ マスクをしていることで免疫が育たない。人間はさまざまなウイルスにさらされることで免疫を獲得して強くなっていく。かつて今のメキシコに栄えていたアステカ帝国は、旧大陸で蔓延していたウイルスに対する免疫がなかったことが絶滅の大きな要因だったとされている。そういった免疫の話や、アステカ帝国の話も学校で習うもの。一方、常時マスクをする状況はそういった学校で習ってきたことに反する。
  
- ・
- ・ 以上、マスク着用による身体や精神への悪影響を示した記事の一例。探せば他にも沢山出てくる。
  
- ・ 次に実際の子どもの声。
- ・ これは異常事態。涙が出てくる。すぐにでも助けてあげたい。

- ・ 学校ではマスク着用で感染が防げるといったたぐいのことは朝から学校が終わるまで、常に話されている。子ども達はそれを聞いて対策をしている。しかしこういった、マスクを常に着用することで、子ども達に起きるリスクについて、しっかりした根拠がある話がされていない。実際に子ども達からも苦しいという声が上がっており、いじめのきっかけになったり、不登校になったりしている。そのことを教育委員会も把握している。ひとつ余談だが、今も私が別件で教育委員会とやりとりしているケースもそう。マスクがひとつの大きなきっかけで、いじめで不登校になっている。それなのに、マスク着用のリスクや、そういった子ども達がいるということについて、周知すら行われていない、全校ではないかもしれないが、周知が行われていない学校があるのはなぜなのか。非常に不思議。やはりマスク着用の潜在的なリスクについて、マスクを着用できない子ども達がいること、不安や不快・不調を感じて学校生活に支障をきたしている子ども達がいることを、ガイドラインに記載し、周知啓発をするべきだ。

では周知をどうすればよいか。富山県の富山市のような好例があるから真似をすればよい。

- ・ 富山県の富山市では、医療と教育が連携し、最新の医学的データに基づいて、新型コロナウイルス感染症への対策を検討し、推進するため、「富山市立学校 新型コロナウイルス感染症対策検討会議」を設置している。座長は小児科医の先生が務めている。
- ・ この検討会議の結果がリーフレットとして保護者にお知らせされる。リーフレットはホームページで確認できるものとしては昨年10月までの14号まで出ている。このリーフレットはすべてよくできている。同じものを小平市でもすべての学校にすぐに配ってほしい。教育委員会の方々にぜひご覧いただきたい。
- ・ そのうち、一昨年(2020年)の9月に出版された6号に、マスクについての記載がある。
  - 趣旨として、**請願事項1～3については、たとえばこういうものを小平市にもつくってもらいたい。**
- ・ **①マスクには、自分自身の感染を防ぐ効果は、ほとんどありません。マスクは、自分が感染していた場合に、飛沫を飛ばさず、周囲の人にうつさないようにするために着けているものです**
- ・ 厚生労働省が言っていることそのまま。請願者の方がおっしゃったように、厚生労働省は、「無症状の人の飛沫からの感染が確認されたことはこれまでただの一度もない」と言っている。この正しい理解が必要だ。そうでなければ、必要以上、過剰な制限につながり、子ども達に不必要な、身体上、精神上的なリスクを負わせることになる。
- ・ **(日本小児科医からのメッセージの欄も読む)**
- ・ 最後に、請願事項4について、委員の皆さんに一番知ってもらいたいことを、請願の提出に向けて集まったお母さん方に、表にさせていただきました。小平市教育委員会のガイドラインは、国のガイドラインより厳しいということ。私も、今回調べて、初めて知った。小平市のガイドラインは、国の衛生管理マニュアル(文部科学省の学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～)をベースにしている。その他東京都教育委員会のガイドラインなども参考にしているということだが、ベースになっている衛生管理マニュアル、新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン、新型コロナウイルス感染症の予防～子供たちが正しく理解し、実践できることを目指して～、など国の方で設けている基準は、そこまで厳しいものではない。
- ・ 国より厳しい制限にするのであれば、根拠がなければならぬ。国はよく分かっている、よく配慮している。それを勝手な判断で省いたり書き換えてしまうということは、国の方で懸念していた問題が起きてしまうことになる。実際に、子ども達の苦しみにつながり、いじめや不登校も起きているわけです。
- ・ そのため、この請願事項4は、言ってしまうと、少なくとも本来あるべき国のガイドラインに合わせたものにしてほしい、と求めているのと同じことだ。これが請願者の方が先ほど言われたこと。もし、国のガイ

ドラインでは対策が足りていないから、小平市では厳しい制限にしているというのであれば、その根拠が必要だ。

- ・ 委員の方々におかれましても、もし、請願事項4に反対するのであれば、国のやり方では不足しているとする、その根拠を示していただかなければならない。そうでなければ、根拠のないことに基づいて、子ども達に過剰な制限を課し、苦痛を強いることになる。国の方でさまざまな問題が起きることを懸念して配慮していたことがなくなるわけだから、それをどう回避するのかもしっかり示していただかないといけないと思います。
- ・ 最後のページは、小平市の方では、ホームページに、周知啓発を行っているところを載せました。小平市の方ではできて、教育委員会の方ではできないというのはやはりおかしい。ホームページをわざわざ見に来る人は少ない。学校ではホームページのどこかに載せて人が見に来ることを期待するだけではなく、しっかり伝わるように、プッシュ型の周知をしていただきたい。
- ・ 私は、先生方、教育委員会の方々の多くが、この子ども達の状況を憂慮していると信じている。私のもとにも、マスク着用がきっかけになっていじめや不登校になっている事例についての相談が複数寄せられている。氷山の一角だ。請願を採択していただければ、苦しんでいる子ども達のためだけではなく、そういった悩みを抱えられている教育関係者の方々の救いにもなると考えている。
- ・ 政和会の石津委員は、昨年9月の定例会で「子どもたちのかけがえのない体験の機会を守るために」という一般質問をされた。私もそう思う。幼い頃に人の表情から感情を読み取ったり、自分の感情を表情に出してコミュニケーションを取ったり、そういったことも、かけがえのない、というより子ども達には欠かせないことだ。友達と小さな声でもいいからおしゃべりをして楽しく給食を食べることもかけがえのない時間。
- ・ なお、マスクができない子ども達がいるといったことを周知することは、単にお互いを思いやるというだけではない。「誰々がマスクをしていないから学級閉鎖になった」とか、「マスクをしていないやつが悪い」、そういうやりとりは、分断や憎しみ、恐怖での支配、自己肯定感の低下につながるだけ。根拠にもとづいた、正しい情報を周知啓発し、お互いを思いやる心を育てること。マスクをつけられない友達もいるのだという多様性を認めること。これこそが学校現場で最も大切なことだと思います。つまり、教育の現場を、分断、憎悪、恐怖の世界にするのか、受容、思いやり、愛に満ちた世界にするのか、どちらを選ぶかという話。委員の皆様にはぜひその点を考えていただきたい。

まとめとして、

- ・ 請願事項1～3については、さまざまな専門家やデータが示す、きちんとした根拠がある。小平市内では、この周知啓発がなされていないことが原因で、実際にいじめや不登校の問題が起きており、子ども達の苦しみの声が多数ある。対応は急を要する。例えば富山市のような具体的な事例を真似すれば、すぐに対応できる。学校レベルでは周知啓発をしている事例もたくさんある。
- ・ 請願事項4については、国が示しているものよりもはるかに厳しい制限となっている小平市のガイドラインを、少なくとも本来あるべき国のガイドラインに合わせたものにしていただきたいということだ。明確な根拠がなければ、国が課している制限よりもはるかに強い制限にすることは許すべきではない。
- ・ 教育の現場を、分断、憎悪、恐怖そして自己肯定感が下がってしまう世界にするのではなく、自己肯定感を高める、受容、思いやり、愛に満ちた世界にしてほしいということ。